

アイヌ民族の歴史と文化

第10回

—(ひと)〈暮らし〉(ことば)からさぐる—

英雄叙事詩—超人たちの物語



遠藤 志保 (えんどう しほ)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究主査

2015年より北海道博物館勤務。特にアイヌ文学を中心とする調査、研究及び博物館の業務に当たっている。

この連載では、第4回(2021年10月号)でアイヌの口承文芸について全体的な紹介を行い、その後、口承文芸のなかでも物語としての内容を持つ3つのジャンルのうち、「散文説話」(12月号)と「神謡」(2022年2月号)を紹介してきました。今回は「英雄叙事詩」を取り上げ、その特徴をご紹介します。

とはいえ、第8回「神謡—神々の物語」でもご紹介したように、物語に限らずアイヌ文化には、地域や個人ごとに様々な多様性があります。英雄叙事詩も同じです。そうした英雄叙事詩の多様性もご紹介したいところですが、今回は、日高の沙流地方の方が残した一編の物語を取り上げ、あらすじやそれぞれの場面などをご紹介しますを通して、アイヌの英雄叙事詩とはどのような物語なのか、少しでも深く知っていただければと思います。

今回取り上げる英雄叙事詩は、門別町(現在の日高町)の鍋沢元蔵(モトアンレツ)さん(1886-1967)が昭和34(1959)年に書き記した物語です。鍋沢さんは多くの物語を知っており、自身でも流暢に語るこ

ができる世代でした。ご紹介する物語は「ポインヤウンマツ イワン ロクンテウ ウコエタイエ(ポインヤ姫と六隻の戦艦が引っ張り合う)」と呼ばれ、1478行に及びます。あらすじは、次のようなものです。

私(=主人公)はトミサンベツのシヌタナカで兄と姉に育てられていた。ある日、どこからかひとりの女がやってきた。女はポインヤ人の妹(=ポインヤ姫)の召使だと名乗り、次のような話をした。

ポインヤ村にレプンシリ人たちが何艘もの戦艦(ロクンテウ)でやってきて、ポインヤ姫をさらおうとした。妹の叫び声を聞きつけたポインヤ人が後を追いかけてなんとか妹を取り戻し、戦いになった。ポインヤ姫は家に戻って紐付きの円盤(アカム)を手にとると、戦艦にそれを投げつけて帆柱に巻きつけ、陸に引きずりあげて粉々にした。そして、私に救援を求めるために召使をよこした、ということだ。

私は女を小脇に抱えると海の中に飛び込んで、ポインヤ村に泳いで行った。向こうに着いた時には女は絶命していた。私は戦いの跡を追って行き、戦場に飛び込んだ。ポインヤ姫は兄を左手で抱えて、大勢の敵と戦っていた。私はふたりをまとめて切り刻み、生き返らせるよう神に祈って死骸を天空に投げた。そうして群がる敵と戦い続けた。

ついに敵を全滅させた私は、ポインヤ村の川上の山の上に立派な城があるのを見つけた。ここまで来て帰るのはどうかと思ったので、その城まで行って、土をかぶって歌を歌っていると、城の中から美しい娘が出てきた。その後についてこっそり中に入ると、魔神(トゥムンチカムイ)である女とふたりの娘がいた。私の気配に気づいた娘は、自分たちは天の魔神の娘で、兄二人と姉と一緒に地上に降りてきたのだが、兄二人は毎日キムント人のところへ行っているという。娘は私に御馳走を作ってくれた。

そのうちにふたりの兄が帰ってくると、母親(=魔神)が、人間の匂いがするという。兄たちはキムント人に会っていたからだというが、母親はポイヤウンペがポインヤ姫を助けに来ていて、娘たちが彼に劣情を抱いているのだという。それに反論する子供たちと

母親の間で戦いが始まり、兄二人は母親に殺されてしまった。私は姿を現して娘たちに加勢したが、母親は天窓から逃げ出した。それを追いかけて行って、やっと彼女の杖を奪い、それで叩き殺した。娘たちは私を山城に招き、食事を作ってくれた。私はこのふたりを自分の城につれていくべきかどうか考えていた。

(中川裕・遠藤志保編『国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵ノートの研究』(2016年) pp.31-32より一部改編)

アイヌ英雄叙事詩の世界観

一読して、戦いの場面がどんどん続いていることがわかると思います。沙流地方の英雄叙事詩は、超人的な力を持った少年主人公が、同じく超人的な力を持った敵たちと、様々な戦いを繰り広げるという物語が多いのです。

戦いとはいっても、主人公が正義で、敵が悪だということはありません。主人公がカッと我を忘れたあげく、戦いに何の関係もない一般人も含めて村をまるごと殲滅するといったこともよくありますので、主人公の振る舞いはまったく聖人的ではなく、むしろ理不尽だったり乱暴者だったりします。ですが、それで主人公が道徳から反していることを咎められるようなことはありません。言うなれば、超人たちによるバトル・エンターテインメントで、少年漫画のバトルや時代劇のチャンバラと同じように、主人公たちによる痛快な戦いとその展開を愉しむ娯楽作品なのです。

この点で、英雄叙事詩の世界観は、日常生活と同じ道徳観や倫理観が通底している散文説話や神謡とは大きく違ってきます。

超人的な登場人物たち

では、先ほどのあらすじをもう少し詳しく見ていきましょう。

冒頭で主人公は兄と姉に育てられています。他の物語でも主人公が親と一緒に暮らしていることはまずなく、兄や姉などに育てられていることが多いです。沙流地方の英雄叙事詩の主人公は「トミサンベツのシヌタツカ」という場所で暮らしている、シヌタツカ

人(アイヌ語では「シヌタツカウシクル」)ですが、物語のなかでは「ポイヤウンベ」(直訳は「若い陸の者」という^{あだ}仇名で呼ばれます。とはいえ、英雄叙事詩には固有の名前がある登場人物はほとんどいません。例外的に主人公の実兄は、美しい髪を持ち主ということからカムイオトプシ(直訳は「神のような髪が生えている」)という固有の呼び名がありますが、ほとんどは敵味方に関係なく、男は「〇〇に住む人(～ウシクル)」、女は「〇〇に住む女(～ウシマツ)」のように呼ばれることが多いのです。上記のあらすじではそれぞれ「〇^{びと}人」「〇〇姫」と訳しています。

さて、ポイツヤ姫の使者を通じて、主人公は助けを求められました。使者の話によると、ポイツヤ村にレブンシリ人たちが何隻もの戦艦で奇襲してきたというのです。この「レブンシリ人」たちが、この物語の(前半の)敵です。レブンシリは「沖の国」という意味です。

ポイツヤ村の人たちはレブンシリ人たちからの奇襲を受けますが、ポイツヤ姫は途中から猛烈な反撃を開始します。敵の戦艦に特殊な武器を投げつけて帆柱に巻きつけ、陸に引きずりあげて粉々にするという、とんでもない力を発揮します。英雄叙事詩では、男だけではなく女も超人的な力で戦いの場で奮闘します。この物語のように武器を手にして戦う場合もありますが、女たちの戦い方の特徴は、アイヌ語でトゥスと呼ばれる不思議な力を使うことです。英雄叙事詩に出てくる女はみんなこのトゥスを有していて、未来や遠くの出来事を見通すこともできますし、^{ひん}瀕死の重体に陥っている主人公たちに息を吹きかけて傷を治したりすることもあります。さらには、敵味方の女がそれぞれ天に昇って、上空で轟音を立てながら戦うこともあります。

こうしてポイツヤ姫が大活躍するものの、敵は何隻もの戦艦に乗った大人数のため、劣勢です。助けを求められた主人公は、ポイツヤ村に向かいます。ここで主人公は海を泳いでポイツヤ村に向かっています。英雄叙事詩の登場人物たちは陸路で移動するということは、あまりありません。空を飛んだり、海中を移動したりして遠くの目的地にもあつという間に到着するというもので、移動方法からして超人的です。なかには

天の世界に飛んでいったり、地下の世界に降りていったりと、人間の世界を超えて移動し、活躍するような物語もあります。

さて、主人公がポイソヤ村に着いたときには、ポイソヤ姫もその兄であるポイソヤ人も死にそうになっていますが、主人公は彼らを切り刻み、生き返らせるよう神に祈って死骸を天空に投げます。生き返らせるために切り刻んで一度殺すというのは、とても不思議に見えますが、英雄叙事詩ではときどき見られるモチーフです。こうした生き返らせ方だけではなく、英雄叙事詩では、味方や敵が殺されても生き返ることがあります。殺されたはずの次のシーンで何の説明もなく登場して、酒宴に参加していたり、戦いに参加していたりするので。

前段と後段

レブンシリ人々を殲滅した主人公は、「ここまで来て帰るのはどうかと思った」と思います。これは、さらに強い敵がいそうな感じがするのに帰ってしまったら臆病者と思われるだろうということです。そして主人公はポイソヤ村からさらに川上へと向かいます。そこにある城に住んでいるのは、魔神（トゥムンチカムイ）の親子でした。

ここから話ががらりと変わります。言うなれば後段ということですが、ここで出てくる敵は前段のポイソヤ村の話とは、まったく関係がありません。ポイソヤ村やポイソヤ姫たちのその後の話も出てきません。英雄叙事詩は、このように新たな敵がどんどん登場しながら、次々と話が続いていきますが、物語全編を通した黒幕や総大将のようなものがあるわけではありません。次々にくりひろげられる新たな敵との戦いはそれぞれ独立したエピソードです。それらのエピソードが連結して、ひとつの長い物語となっていくのです。

さて、この後段の敵はトゥムンチカムイ「魔神」です。これはしばしば英雄叙事詩には登場しますが、「海獣の皮と陸獣の皮とを縫い合わせた」ような鎧よろいを着て、「古くついた血が黒い漆のように、新しくついた血が赤い漆のように這い上がる」というねじれた杖を持つ

ているという異様な姿として描かれることが多い、不思議なキャラクターです。このように英雄叙事詩の主人公が戦う相手は、人間だけとは限りません。ここに出てくる魔神の他にも雷の神、あるいはフリと呼ばれる巨鳥などが敵として出てくる物語もあります。そうした神や化け物が相手でも、主人公は勝利するのが常です。

魔神を倒した主人公は、彼に味方をしてくれた魔神の娘2人を自分の城につれて帰ろうかと考えるというところで終わっています。自分の城につれて帰るとするのは、婚姻関係になるという意味です。英雄叙事詩の最後では、こうして味方同士が婚姻関係を結んで宴会をするという大団円になることもあります。この物語はなんとも中途半端な終わり方にも思えます。ただ、この物語のように、まだ先が続きそうなところで終わるという結末の話は多く見られ、これも英雄叙事詩の特徴なのです。

戦いの場面と表現

あらすじでは「戦っていた」などとまとめている戦いの場面ですが、実際の物語ではここが聞かせどころであり、盛り上がる場面になります。基本的な戦い方は刀での戦いですが、そればかりではなく、空を飛んでお互いを追いかける空中戦があったり、互いに片手で握り合って逃げられないようにした上でもう片方の手に持った刀で互いに斬り合ったりと、人間離れした数々の戦いがくりひろげられます。

主人公が刀を振るって敵を切る場面では、次のような表現で語られます。

- ① 私が激しく振った刀は
虹の弧のように
何十もの群衆を
片端から切って
片端から散らし（同前、pp.331-332）
- ② 上を通る太刀影は
舞い上がる炎のように、
下を通る太刀影は
飛び散る炎のように（同前、p.348）

こうした「虹の弧のように」といった誇張的な比喻や、「上を通る」「下を通る」のような対句を使った表現などは、この物語だけではなく他の英雄叙事詩でも共通して使われる、常套的^とな表現です。

こうした常套的な表現は戦いの場面だけではなく、主人公が身につけている装束の描写や、美しい女性を描写する時の様子など、いろいろな場面で使われます。「こういう場面のときには、この表現を使う」ということが決まっていますので、物語の一言一句を丸覚えするのではなく、このような常套表現のストックをたくさん頭に入れていて、物語の流れや場面によって必要なときに必要な表現をつないでいくという方法で、長い物語であっても組み立てることができるのです。これは英雄叙事詩に限らず、広く口承文芸の語りに共通する語りの特徴です。

英雄叙事詩を読む・聞く

今回ご紹介した物語は、国立民族学博物館に収蔵されている、鍋沢元蔵さん自身が筆録したノートに書かれているものです。ノート自体はカナ表記によるアイヌ語ですが、現在は日本語訳も付けた報告書が刊行されています。

こうした刊行物や書籍などで物語を読むだけではなく、『萱野茂のアイヌ神話集成』（ビクターエンタテインメント）のようなCD付きの図書などもあるので、最近ではいつでもどこでも物語を聞くことができます。

アイヌ語がアイヌの人びとの暮らしの中であたりまえに使われていた時代には、英雄叙事誌も様々なかたちで語り／聞いて愉しまれてきました。しかし明治以後の同化の圧力のなか、生活でアイヌ語が使われなく

なり、特に子どもたちにアイヌ語を伝えることが断念されていきます。現在は、子どものころにアイヌ語を聞いて育ち、アイヌ語の物語を聞き覚えた世代の人たちによる口演を実際に聞くことは叶いません。

特に英雄叙事詩は、複数の戦いが連なっていく長いストーリーと、英雄叙事詩に特有の常套表現とを組み合わせられて語られるため、それを語るのには「もともと誰にでもできるというものではない、特別な才能と環境、努力を必要とされる一種の特殊技能」（中川裕『アイヌの物語世界』改訂版（平凡社ライブラリー）、p.140）であると言われていています。実際に、現在公開されている物語で最も新しい記録を探してみると、散文説話については、2002年の録音資料として、連載第6回でもご紹介した平取町の上田トシさん（1912～2005）が語ったものなどがありますが、英雄叙事詩は1993年に千歳市の白沢なべさんが語ったものが最も新しいようで、英雄叙事詩の語りは散文説話よりも約10年前に実際に聞くことが難しくなっていたらしいことがわかります。

ただ、遺された録音などをもとに物語を覚えて口演することは様々な機会で行われていて、現在のアイヌ語継承活動における大きな軸のひとつにもなっています。それらの多くはテキストをそのまま暗唱するという方法によるものです。そのため、常套表現のストックをその場で紡いでいくという方法とは異なりますが、それは現在における、新しい語りのあり方、新しいパフォーマンスのあり方だと言えます。アイヌ文化に限らず、あらゆる文化は固定的なものではなく常に変容していくものですが、英雄叙事詩などのアイヌ文学の口演も例外ではなく新たな形に変容しているのです。



『萱野茂のアイヌ神話集成』
（全10巻）

同書では付属CDで音声も聞けます



英雄叙事詩などのアイヌ口承文芸を題材にした作品も近年は増えています。画像は「アイヌのお話アニメ」のDVD（公益財団法人アイヌ民族文化財団制作）。専門家の協力を得ることで、文化検証もしっかりした作品になっています